

傍目で異常に恋してる（ヒロインの自我がすごい版）

鷹司秀の家が爆発した。

奴の目を盗んで、私がキッチンに細工をしたのだ。

監禁当初は決まった部屋の出入りしか許されなかった——しかも、鷹司秀の付き添いが絶対条件で——私がキッチンに入れるようになるまで、それはそれは大変な日々があった。

監禁強姦魔の油断を誘うためといえど、媚びへつらう日々は本当に辛かった。主に下半身が。

そして今、爆発した家を二人で茫然と眺めている。

私の目論見としては、いつも通りにキッチンに入った鷹司秀ごと爆発させる予定だった。

それがどういうわけか、二人で出かけている隙に静電気か何かが発生してしまったらしい。

お出かけ先で散々変態プレイを楽しまれ、疲労困憊になり、車から家へ運び入れるため強姦魔に横抱きされた状態で、轟音ののちに燃え盛る家屋を見ている。

ちらりと見上げて鷹司秀の表情を窺うと、普通に驚いている様子だった。

この男、こんな顔もするのか。

郊外にある、小さな森の中の邸宅だ。

火事で森が焼けてしまうとまずいからか、鷹司秀が通報をする前に消防車が来た。

予定とは違ったが、千載一遇のチャンスだ。

助けを求めようと大きく息を吸った瞬間、信じられない素早さで車に押し込められた。

いつもの後部座席で、いつものように逃走防止の器具で固定されてしまう。

内心で、最悪チャイルドシートと呼んでいる。

手足はしっかりと手錠で固定されたし、ブランケットをかけられ隠蔽工作もばっちりだ。

消防士たちはまずは火に夢中らしく、これでは注意を引く前に鷹司秀に完封されてしまう。

私を最悪チャイルドシートに固定した鷹司秀が、覆いかぶさったままにつこりと笑った。

「君だね？」

バレた。

素直に認めるのと、後の調査で発覚するのとどっちが酷くされるだろうか。

迷って無言になっている間に、鷹司秀は車の中に常備してる睡眠薬を私の口にねじ込んできた。

錠剤ごと喉の奥まで指が突っ込まれ、呻き声が出る。

しっかり飲み込んだのを確認するために、口の中をあちこち探られたあとやっと指が引き抜かれる。

「良い子にしてるんだよ」

額に唇の感触がして、鷹司秀が離れていく。

職質で睡眠薬見つかれ。

意識が薄れていく中で、それだけを強く願った。



次に気がついた時、ホテルの一室にいた。

具体的にどこのホテルかはさっぱりわからないが、内装を見て一発で高級なところだと理解した。

人目につかず運び込むことは不可能だったはずだけど、どうやって誤魔化したのだろう。

金さえあれば、誘拐した人間と一緒に高級ホテルに泊まることも可能なのか。

世の中の理不尽に、改めて怒りが湧く。

起き上がって動こうとしたが、ベッドで寝ていた私の手首には当たり前のように手錠がかかっている。

そして左の足首にかかった足枷が、延長した鎖からベッドの脚に接続されていた。

詰んだ。

もうベッド抱えて脱出するしか切り抜け方が思いつかない。

しかもこのベッド、クイーンサイズだ。

そしてさつきから扉の向こうから微かに響いていたシャワーの音が、止んだ。

石鹸の香りとともに、バスローブを着た鷹司秀が寝室に入ってくる。

「目が覚めたんだね、気分はどう？」

こいつにこう聞かれた時に、最悪以外だったことはない。

鷹司秀は無視さえしなければ滅多に怒らないが、さすがに家を爆破されたら怒るだろう。

“お仕置き”は大抵、単に快樂責めだけど今回ばかりはどうなるかわからない。

まだ髪も湿っている状態で、鷹司秀が私の隣に座る。

クイーンサイズのベッドが不穩に軋んだ。

大きな手が、私の頭を撫でる。

「少しおかしいとは思ってたんだ。最近はず分と素直だったし、もしかして心情の変化があったのかと思って喜んでただけ……君には振り回されてばかりだ」

鷹司秀が、苦笑する。

その表情に怒気は含まれていないが、油断はできない。

髪を撫でていた手が降りてきて、頬に触れる。

風呂上りの肌は温かく、それから良い匂いがした。

「火元はキッチンだったそうだよ。そういえばこの間から、一緒に料理するようになったよね。君が作ったものを食べられるのは、すごく嬉しかったんだけどな。——もし家にいたら、僕ら二人とも死んじゃってたんだよ、わかってる？」

そうら来た。

鷹司秀が、声を低くして凄んでくる。

いつもならそれだけで全身が強張って何も言えなくなるけど、今回ばかりは言葉がすらすと出た。

家が爆発すれば、自分も死ぬかもしれないなんて分かっている。それでも、キッチンを使うのは大抵鷹司秀だ。

爆発の威力がどのくらいかは分からないままやったことだけど、少なくとも鷹司が死ぬならそれでよかった。

勢い余って、私が死ぬことになってしまっても。

怒鳴り声まじりに、だいたいそんなことを言った気がする。だだっ広い寝室の中、私が肩で息をする音だけが響く。

ずっと隠していた殺意を告白したあと、鷹司秀は喋らなくなってしまった。沈黙が続くことに耐えられなくなり、視線を上げる。

無表情か、怒りか。

そのどちらかだと予想していたのに、鷹司秀は涙目だった。

悲しんでいるのとは違う、どちらかというとこれは興奮している。

「……僕と一緒に死んでもよかったなんて。そんなに、僕のことを想って……」

違うなあ。

“あなたと一緒に死にたい♥”的な話では全くなかったのだが、鷹司秀はそう受け取ったらしい。

分厚い体が、いきなり抱きついてくる。

バスローブのはだけたところから、胸筋に顔が埋まった。

震えている。感動している。完全に誤解で。

「大丈夫だよ、もし君に何かあったら僕はちゃんと後を追うから。だから安心して」

何も安心できない。

絶対嫌なので、やっぱりどうにかして心中じゃなくて鷹司秀だけ仕留めようと思う。そして一秒でも長く、叶うなら五十年ほど長く元気に生き延びるのだ。

私は心にそう誓いながら、機嫌を損ねないよう無言を貫いた。

あとお仕置きはなかったけど、鷹司秀が興奮したので結局めちやくちや抱かれた。畜生。